

(5) 「かかわり」の大切さの確認ー共に育つことの意味ー

① 特別支援学級の取り組みから

本校には知的の特別支援学級があり、3名在籍している。在籍している児童はそれぞれの個性をよりよく発揮して、共によりよく育っている。そこには特別支援学級担任の計画的・意図的な指導が位置付き、教職員、全児童が共に育つという意識を自然に持つことができている。

特別支援学級担任の「活動をふり返って」にある「たのしいやおやさん」では季節の野菜を販売する活動を行っている。自分たちが育てた野菜を教職員がいろいろに声をかけて買う中で、子供たちの自信が育ちつつある。また、「秋のスポーツ教室」では、徳島県障害者スポーツ協会の方とともに全校児童に対して教室を運営することができた。お礼の手紙には3人の頑張りに対して、自分も見習いたいというものが多く、ここにも共に育とうとする姿が見られる。二中校区特別支援学級交流会では、他校の子供たちと楽しく交流し大切な「かかわり」の場をもつことができた。

② 学習発表会6年の思い

6年生は共に育ってきたことを学習発表会でカップスやダンス、そして書道パフォーマンスで表現した。7人の息が合わないと失敗するカップスを見事にやってのけた。また、ダンスもよく練習し、書道パフォーマンスにつなげ、そこには大きく「笑顔」という字を書き、その周りには7人で育つ



【特別支援学級の活動を振り返って 特別支援学級担任】

生活単元と自立活動の時間を使って、制作、調理実習、栽培、体育などの活動を行っている。その中で、①たのしいやおやさん②秋のスポーツ教室③二中校区特別支援学級交流会について報告する。

①「たのしいやおやさん」は、児童が植え付け、水やりをし、育てた野菜などを収穫し、職員室で販売する活動である。これまでに3回店を開き、ピーマンをはじめ、春はタケノコ、夏は夏野菜、秋はスタチなどを販売した。ソーシャルスキルトレーニングのほか、簡単な計算学習を実践する場になっている。売り上げは調理実習の材料代として使う、好きなおもちゃを買うなど、話し合いで決めキャリア教育も進めている。

②「秋のスポーツ教室」は全校児童を対象に行う、障がい理解のための啓発活動として行った。今年は、徳島県障害者スポーツ協会が行うスポーツ体感教室を利用した。パラスポーツを体験する中で、のぞみ学級の子どもたちが進行に加わり、頑張っている姿を全校児童に見てもらった。事後には各学年から手紙をもらい、ほめてもらうことで、自己有用感を育てることにつながったように思う。

③「二中校区特別支援学級交流会」は、校区で持ち回りのクリスマス前の行事である。昨年今年と路線バスを使っているが、今年は桑野小児童と一緒に往復することで交流を深めることができた。大勢の人の中に入ると、テンションが上がって收拾がつかなくなったり、逆におじけづいたり、コミュニケーションに何かと問題の多い子どもたちが、学級を飛び出して、学習する機会をこれからの大事にしていきたいと思う。



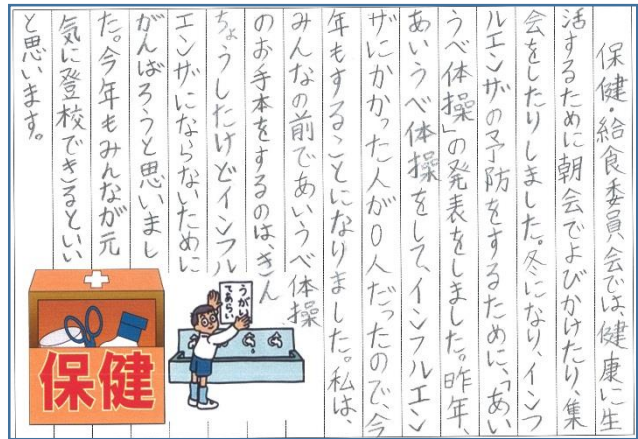
てきたことへの感謝とこれからも7人が根っこをはって仲良く笑顔でいようと書かれている。子供たちの思いは、こういうところに表れて来る。共に育ってきたことの大切さは長い「かかわり」の中でより高められていく。このような気持ちを我々教職員は何よりも大切にしたいと思っている。

③ 保健室、保健委員会の取り組みから
 子供が毎日元気に学校に登校できることが何よりの願いである。その願いをさまざまな面から支え、応援してくれる存在が保健室や保健委員会の取り組みである。

右の感想にあるように、「あいうべ体



「継続」して掲示を変えていくこと、掲示やお知らせで子供たちの健康への関心を高めていくことなど、当然のここのようなことを地道にどれだけできるかが大切であろう。



操」を呼びかけ実践すると、昨年度はインフルエンザ罹患者がゼロだったことが述べられている。また、保健室前には子供たちが立ち止まって見ていく掲示がその時々成されている。

VII 研究の成果と課題

(1) チーム山口として

本報告書に掲載した諸事業を概観すると、「この1年で多くのことをしてきた」「それぞれの場面で子供たちは頑張り、よりよく成長した」という感慨をもつ。この感慨を今少し踏み込んで考えると、それは教職員の「多様性が生み出す力の発揮」に収斂するのではないだろうか。「やるぞ チーム山口！ とことん寄り添い、続けてすれば、子供も教師も絶対伸びる！」というキャッチフレーズのもと、さまざまな事業を起案し、協力し合い、子供の「よりよい成長」をめざして教育活動を行う中で、教職員自身の「個性的な取り組み」が発揮され、チームとしてまとまっていくと「多様性の発揮」となるのではないだろうか。

そのように考えるならば、まず校長が教育の方向性を明示する（例 APP のキャッチフレーズ）。担当教職員の起案に対して共通理解できたならば、教職員の「個性的な取り組み」に対して各自の役割分担に即して支援し、協働的に関わる。単一の事業が複数回行われることによって、それは「多様性」の様相を呈し、「多様性が生み出す力の発揮」につながるであろう。

また、それぞれの事業は教職員の十分な理解のもと行われる。それゆえ、そこにおける子供の活動も保証され、見守られ指導も行き渡る。チームとして事にあたる強さがここにある。これが何よりの成果であり、その成果を教職員は強く感じていることが次につながる原動力となっている。

課題は、チーム山口と言ってもそれは校内にとどまっていることである。学校外の人材を学校教育に取り入れ、「チームとしての学校」という文部科学省が描いている学校像には至っていない。少人数ゆえに学校内である面はまかなえることが要因の一つである。もう一つは、校外の人を入れるとなれば、やはり打ち合わせも今まで以上に頻繁に行わなければならない。現時点、教職員だけで間に合っていることを校外の人にまでお願いすることは、結局は仕事量を増やすことになり、教育効果が上がらないのではないかという危惧をもっていることである。

遠くない将来、コミュニティースクールをめざすのであれば、ここに記す課題をクリアしなければならない。今後は現在のコミュニティースクールとなっている学校への視察や研修に行くことで、本校の在り方を考える場としたい。

(2) 「継続」と「集中」

「継続」する教育課題を年度当初に設定し、地道に続けていくことで、それは力となり自信へとつながっていくことが、学習発表会において証明することができた。また、時期に応じて「集中」して事業に取り組むことで、教育活動にメリハリが付き、子供たちも短期的な目標に向かって努力し結果を受け止めることができることも各事業の中で見いだすことができた。これら「継続」「集中」のいずれの事業も、やはり教職員集団の共通理解と同じ方向性へ進むチームとしての力であろう。先にも述べたが、「継続」「集中」した取り組みの中で、力を育み、それを発揮し自信を得るのは子供たちだけではない。教職員も共に歩むこと(寄り添うこと)で教育力を育み、達成感を感じ自己有用感を高めたり、所属意識を深めたりすることができた。

課題として、「継続」教育課題は長いスパンで地道な取り組みゆえ、定着することがなかなか定着することが難しい。また、「集中」教育課題は、年間ルーティーンに位置付くことも多く、ただその時期が来たので頑張るという意識に陥りやすい。

「継続」教育課題も「集中」教育課題もある面でルーティーンに位置付く。それを地道に行う継続力を我々が自らにいかにつむべきなのか、未だその方策を見いだし得ていない。

(3) 「かかわり」の中で育つ

人は「かかわり」の中で人に学び、人に認められ、共に育つことに喜びを感じる。学校教育はこの「かかわり」を抜きには考えられない。それゆえ、教員はさまざまな手だてを用いて「かかわり」の場を設定する。その成果は先に示した事例にある通りである。

課題は、「かかわり」の場を通して感じ取った思いを、どのように「評価」し、その評価をもとに子供たちに還元するべきか、その手だてが十分に判明できていないことである。

感想文を書いたり、発表したりしている姿から子供たちの成長や思いは把握できる。その子供たちの思いを学校全体に広げたり、友達や保護者と共有していったりすることで、さらなる「かかわり」を生み出すことができる。確かにホームページや学校だよりで広報は行っている。その広報活動がどのような効果を生み出しているのか、また何らかの効果を生み出しているならば、それがどのように学校教育に還元しているのかが見いだせていない。次年度の課題とする。

(4) 不易と流行

我々は、さまざまな手だてをもとに多くの事業を行った。成果と課題はそれぞれにある。確かに言えることは、我々教職員に求められていることは、「継続」力、「集中」力、「かかわり」を生み出す力、子供の「思い」を還元できる力などであろう。それはいわば「教師力」、「教師の人間力」とも言える。それを支え、豊かにするために、我々は研修を行っている。これからも我々山口小学校教職員は子供のために学ぶ人であり続けたいと思っている。

【研修主任 本年度の研修について】

本校の今年度の研修主題「基礎・基本を身に付け、自他を大切にするとともに、さまざまなかかわりを通して、よりよく成長しようとする児童を育成する」を念頭に置き、これまで、研究授業や講習会を行ってきた。

研究授業ではほぼ毎回外部から講師を招き、授業力の向上を図るとともに、授業研究会は全員の意見が反映される話し合いになるよう工夫した。活発な意見交換を行うことで、授業者だけが学びを深める研究会ではなく、教職員全員が授業者とともに考え、よりよい授業づくりに学校全体で取り組んでいこうとする姿勢をつくることができたと思う。

また、体育実技研修では阿南体操協会の方を講師に招いて、児童に実際に指導していただきながら、具体的な指導方法について実践的に学ぶことができた。そして、学んだことをその後の児童への指導に十分生かすことができたので、今後は、図画工作や音楽等の実技研修も取り入れていきたいと考えている。

課題としては、校外でそれぞれが受講してきた研修会での学びを、教職員全体で共有することがあまりできなかったことが1つあげられる。来年度は、他校の優れた実践について教職員間で情報を共有する時間も確保したい。

VII おわりに

多くの実践の中から「かかわり」と「継続」そしてときには「集中」した教育活動の中に、子供たちの確かな成長や、本校教職員の教育的手だてを見いだすことができた。研究仮説と秋分に対応することはできなかったが、「チーム山口」として協働して子供たちのよりよい育ちを旨とし、全教職員が教育活動を行ったことは事実である。

下は本校教職員の週録の抜粋である。その多くに「感謝」という言葉が見られる。共に手を携え、目標に向かって進むとき、人は人に支えられ、人に学ぶことを強く感じる。本校教職員もいくつかの場面でそれを感じ「感謝」という言葉を記したのだと思う。

私たちは、子供が毎日学校に登校し、その「よさ」を発揮して学ぶ者同士でよりよく育つことを何よりも願っている。そのための努力は厭わない。しかし、学校現場を取り巻く環境は年々厳しいものとなりつつある。そのようなときにこそ、職場での信頼関係は何よりも大切である。ある教職員はリフレッシュ休暇をとれたことに対して謝辞と本校職場に対して誇りを感じると述べてくれている。リフレッシュ休暇は当然の権利ではある。しかし、このような思いをもって週録に記述してくれる教員がいることに管理職として感謝したい。

これからもさまざまな「かかわり」をもとめて、「継続」し、協働して「チーム山口」として子供たちによりよい教育を行うことを教職員一同で共通理解し確認し合っている。そのために、私たちは教育における「不易」と「流行」を峻別し、常に子供たちのよりよい育ちに寄与できるよう、「チーム山口」としてこれからも研鑽を積んでいく所存である。

反省	素直でやる気いっぱいの子供も中にはござえられ、前期を終わろうとしています。 子どもたちに感謝、保護者の方に感謝です。自分は何ができていたか...
----	---

反省	保護者のみなさん、子どもたち、先生方... たくさんの方々にお世話になりながら前期を終えることが出来ました。後期は4年生にむかって、学習面も生活面ももう少し密度のこもりに行いたいと思います。
----	---

反省	大変いそがしい時期にリフレッシュ休暇をいただき、申し訳ありませんでした。おかげで妻とふたりにリフレッシュができました。カーニバルをしていただいた先生方には、感謝しかありません。また、そういったことを休んでくださる職員集団であることに誇りを感じます。
----	--

反省	学習発表会の練習では、5年生3人の主体的な練習に取り組む姿が多く見られ、また準備等でも自分の責任と、し行動に助けられ、今回の行事と行かされたことに感謝の気持ちで自然と行かされた。
----	---